

近世二條城蔵詰米と京都商人

渡邊 忠司

はじめに

近世京都については、徳川政権による京都および畿内・西国の支配体制や、「町衆」概念を基盤にした町政や町の構造、町組など自治に関する研究が優先的に進められてきた。ある意味で、この研究観点は京都研究の伝統的な観点ともいえるべき研究方向であり、近年もこの分野の研究は盛んであるが、これに加えて市中の商業流通、商家経営、金融や流通などの研究が出されている¹⁾。

京都の金融において、享保二十年（一七三五）十二月十二日に設置された米会所は重要な位置にある。米会所は京都町奉行の管轄下にあり、その指示と京都商人の参画によって設立された。運営は京都商人らによって米方・貸付方に分けられて運営された。貸付方は金銀銭の市中町民らへの貸付を業務にし、これに京都商人が関わって

いたが、京都の通史『京都の歴史』の近世編には、米会所の設置や運営、業務の内実に関する叙述はほとんどない。商業金融・金融業の叙述に対して、徳川政権・京都町奉行が管轄する米会所の記述は不十分であると言わざるをえない。⁽²⁾

これには理由がある。それは米会所とその貸付方に関する史料が未発掘・未発見であったからである。というよりも、これまで米会所の金融機能に大きな関心が向けられていなかった、そのために関連史料の探索を怠っていたというべきであろう。その大きな要因の一つに京都研究の「伝統的観点」がある。そのために他の研究分野に関心が向かなかったともいえよう。米会所は二條城蔵詰米の払米を行う機関であるが、それが研究対象とならなかったためである。同様の事例は他にもある。⁽³⁾

五畿内と近江・丹波の幕領の年貢米は大阪・二条・大津の御蔵と江戸浅草御蔵に納入されていたが、これらの米は大阪・二条・大津の各蔵から市中へ払米されていた。管轄は寛文八年以後、京都町奉行所であったとみられる。記録では、享保二十年十二月十二日に払米が京都・大津の商人に委託されるまで、元禄五年（一六九三）以後から享保二十年十二月八日まで毎年京都・大阪・大津の米商人による入札によって払米されていた（『京都町触集成』第一巻・第二巻）

前川五郎左衛門家文書は佛教大学が所蔵する、京都の米会所関係を中心にした膨大な史料群である。前川家は代々恵比寿屋莊兵衛を名乗り、初代の莊兵衛義虎が延享三年（一七四六）九月に京都へ奉公に出て、その後両替業を始めて急速に蓄財、後には京都糸割符仲間に加えられるまでになり、有力な京都商人の一人となった。前川家は茶屋四郎次郎や後藤縫殿助などの初期特権商人や三井や住友あるいは鴻池など新興町人のように、呉服や酒あるいは綿・油など特定の品物の売買で蓄財し、両替商にまで発展した商人ではない。恵比須屋前川家は創業当

初から金融業を中心に経営を展開・拡大した商人で、市中金融を中心にした貸付業務、金貸業を商いの基盤としていた。恵比寿屋はそれを基に、後には米会所貸付方の運営を独占し、多くの近世商人と同じく大名・旗本などの掛屋・用達も勤め、大名貸も行っていた。近世中期の創業ではあるが、徳川政權、特に京都町奉行所と結びついた商業活動により経営拡大したことは近世特權商人の特徴を示している^④。

本稿は京都二條城の米蔵と城米・詰米の機能とその変化について、京都町奉行所管轄下の米会所に関わる京都商人の実態を説明する前提として検証する。米会所は米取引の場であり、大坂での米取引に代表されるように、領主米の入札・売買の場であり、市中町民・周辺在方への飯米供給の機関であった。京都地域では大津の米会所が北陸・奥羽地域の諸大名の領主米を対象とした取引市場で、大津・京都市中への飯米供給を担っていた。

これに対し京都の米会所は二條城御蔵の払米を対象とした入札・売買場で、京都市中への飯米供給にあったとはいえ、大坂・大津の米会所とはやや性格を異にしていたといえよう。京都米会所は米方と貸付方に分けられ、払米の業務よりも貸付方に重点が置かれ、しかもそれが商人に委託されていたことに特徴がある^⑤。享保二十年の開設は享保の改革と関連しており、その中核的な政策であった財政再建のための年貢増徴・増収策と米価の調節、特に米価の引き上げを目的の一つにしていたとみえることは妥当であるが、むしろ貸付方に重きを置いていたことに注目すべきであろう。前川家文書目録でも米会所貸付方に関する記録が圧倒的に多いことは、商人の関心が利益率の高い方向に向かう傾向が強いことと関係しているが、そればかりではなく、当時の京都町奉行所が置かれた財政上の状態にも関係がある^⑥。

以上の問題関心から、京都米会所の設置に至る二條城御蔵とその収蔵米の徴収地域・収納高、城米・詰米の役割と機能の変化とそれに伴う払米の概要など基本的な要項について検証する。

一 二條城の御蔵と蔵詰米の概要

(一) 二條城御蔵の概要

近世武家政権の城郭は、その城下町とともに領域支配の軍事的・政治的拠点として築造された。城郭は戦乱期を過ぎ政治的支配拠点の役割が強くなったとしても、軍事的性格を失ったわけではなく、城内の蔵には軍事用の城米・城付米・詰米として、米・大豆その他の物資、糶などが貯えられていた。⁷⁾

徳川將軍直轄領の年貢米は、畿内・西国地域では基本的に大坂・京都・大津の御蔵に収納されていた。その始まりは慶長五年（一六〇〇）関ヶ原後に伏見城が軍事的拠点となってからであろう。同六年から八年に二條城の築造、元和元年（一六一五）には豊臣氏の滅亡、同五年には大坂が直轄地となり、同六年から寛永五年にかけて大坂城が再建された。⁸⁾

これに対応して、寛永二年（一六二五）には伏見城廃城に伴う天守の二條城移築があり、徳川政権が慶長六年に築造を始め、同八年に天守を持たないままに儀礼・儀式の場として運用されていた二條城が、軍事拠点としての伏見城の役割も担うこととなった。ここに至って、京都における武家政権の象徴としての城郭、二條城が完成したといえる。

それに対応する軍事的意味合いの二條城の御蔵と蔵詰米もこのとき確定し、さらには伏見城に代わる畿内・西国の軍事的拠点となった徳川氏大坂城の御蔵と蔵詰米の位置付けも確立したとみてよい。この後、元禄期には京都・大津・大坂の各御蔵が再調整され、年貢米の収納は二條城と大坂城に集中されるようになった。『京都御役所

向大概覚書』（以下『大概覚書』）には、元禄三年（一六九〇）に高槻御蔵が廃止されて大坂に集約されたこと、また元禄十三年には大津御蔵の縮小と二條城への集約が記される^⑨。

この経緯は後に触れることにして、寛永二年から元禄十三年までの二條城御蔵の概要をみておきたい。二條城の蔵詰米は二條城内外の御蔵に貯えられた。表1はその一覧である。

御蔵は城内に三ヶ所、城外に四ヶ所配置されていた。それぞれの蔵敷は桁行が三間に統一され、梁行が四八間から一七間という横長の長方形の御蔵であった。たとえば、

一、二ノ丸台所前 三間梁二四八間 七戸前 一棟
一、本丸高麗橋前 三間梁二十七間 二戸前 一棟

とあり、七戸前一棟・二戸前一棟などと表示されているように、一棟三間と四十八間の長方形の棟続きの建物が七つや二つに区画された建て方であった。これがすべてで七棟あり、三三の区画があった。一戸前の詰米高は一二五〇石から一七五〇石、総数は三三戸で、蔵詰米高は最大四万七〇〇〇石であった^⑩。

同様の建て方で、大津には二〇棟の蔵があったが、元禄十三年には表2のように六棟一四戸前の蔵に、詰米高は一万五八〇〇石余であった。『大概覚書』には、この経緯を「右御蔵式拾棟有之候処、元禄十三辰年拾四棟御払二成、如此六棟相

表1 二條城内御蔵数と詰米高

御蔵の位置	蔵 敷 間	戸 数	詰米高 石	1戸前詰高	
				6戸前7間	1戸前6間
二ノ丸台所前	3×48	7戸前1棟	7300	1400	700
本丸高麗橋前	3×17	2戸前1棟	2500	1250	
天守下	3×18	2戸前1棟	2600	1300	
城外御蔵	3×20	14戸前7棟	22400	1300	
城外御蔵	3×25	4戸前2棟	7000	1750	
城外御蔵	3×20	2戸前1棟	2800	1400	
城外御蔵	3×20	2戸前1棟	2400	1400	内1戸前5間貸出
合計		33戸14棟	47000		

備考：『御役所向大概覚書』上、170～172頁。他に本丸多門櫓2000石あり。

残雨宮庄九郎預りニ成候」と記している^{①)}。

元禄期以前には、京都にとって年貢米他の米穀類貯蔵は二條城の御蔵よりも大津御蔵が重要視されていた。それは寛文十一年（一六七一）の東廻り、同十二年の西廻り航路の整備以前は、北陸・奥羽地域の米穀・物産の大部分が敦賀・小浜から大津を経由して京都に回送される、京都を中心にした流通経路があったからである。特に西廻り航路の整備は大坂を中心にした日本海側の物資流通を促し、京都が全国中央市場の位置を大坂に譲ることになったのである。

その現れの一つが大津御蔵の縮小であるが、これに加えて蔵詰米の軍事的役割の低下もあった。大津御蔵にあった糯蔵の廃止とその二條城での糯蔵の新設がそれを示している。『大概覚書』にはこの経緯が記されている^{②)}。

一、正徳四亥・慶安元子・同式丑ニ糯五千石余大津御蔵ニ詰り有之候処、朽

損候ニ付元禄十二卯年御弘二成、夫今二條 御城内御本丸之御多門江新糯詰り申候、

大津御蔵での糯蔵の存在は、京都にとって大津が軍事的観点からも重要な位置づけにあったことを示している。その糯蔵に正徳（正保カ）四年（一六四七）・慶安元年（一六四八）・二年に五千石が詰められていたが、それが朽ち損じたために、元禄十二年（一六九九）に廃止されたというのである。

正保・慶安に貯蔵されたまま約五〇年も詰め替えられていなかったことが、大津の糯蔵が軍事的な意味合いを失っていたことを示しているが、それはともかく元禄十三年になって、これによって蔵詰米や糯の御蔵が大津から二條城に集約されたことになる。それが二條城本丸御多門の糯蔵であった。

表2 大津御蔵数と詰米高（元禄13年）

御蔵の位置	蔵 数	戸 数	詰米高
	間		石
	3 × 13	1 戸前 1 棟	2415 余
	3 × 11	1 戸前 1 棟	2050 余
	4 × 9	1 戸前 1 棟	2230 余
	3 × 13	2 戸前 1 棟	2415 余
	3 × 20	2 戸前 1 棟	3720 余
	4 × 12	1 戸前 1 棟	2970 余
合計		14 戸 6 棟	15800 余

備考：『御役所向大概覚書』上、342～343頁。

二條城蔵詰米は直接には寛永二年に始まったが、徳川政権は寛文十一年・十二年の全国流通経路の整備を行い、それに対応させるように元禄三年から元禄十二年に年貢米収納蔵の再整理・整備を行った。これによって高槻蔵の廃止、大津御蔵の縮小、糯蔵の廃止と二條城への移転があり、大津中心の米穀供給拠点が京都に切り替えられたのである。

ちなみに大坂の御蔵は大坂城修築時に玉造と西の丸に設置された。また大坂城外には天王寺御蔵が置かれた。その後高槻御蔵の廃止が元禄三年にあり、翌四年以降は大坂御蔵へ納入され、享保十八年四月には天王寺御蔵が難波御蔵に移された。大坂の御蔵は大坂町奉行の管轄下に御蔵奉行が配属され、その管理する御蔵は「玉造御蔵場に米蔵三十一棟米改会所三ヶ所、西丸に米蔵十二棟・糯蔵四棟・米改会所一ヶ所」があった¹³⁾。

また難波御蔵は摂津国西成郡難波村（大阪市中央区）にあり、東西七〇間・南北一八〇間の所に、梁行四間と桁行三六間の米蔵が八棟、桁行二五間と梁行三間の米蔵が一棟あった。八棟の方は一棟三仕切りで四戸前宛、一棟の方は二仕切りで三戸前宛であった¹⁴⁾。

この結果、『大概覚書』によると、畿内・西国の直轄領からの蔵詰米は正徳から享保初年にかけて、二條御蔵詰米が米三万から四万石、大豆三百石から四百石、大坂蔵詰米は米五万八〇〇〇石、大豆二〇〇〇石余、また大津蔵詰米は四〇〇〇石であった（表3）。

(二) 二條城蔵詰米の収納地域

京都・大坂・大津三ヶ所の御蔵だけで約一〇万石の蔵詰米が貯えられていたが、この

表3 大坂・二條・大津御蔵詰米大豆（享保2年改）（単位は石）

	納入高	納入地域（通常）	不足分補填地域
大坂御蔵詰米	58000.000	五畿内・近江・丹波・播磨	丹波・石見・出羽・越後他 （年々不同）
大豆	2000. 余	摂津・近江・丹波・播磨	
二條御蔵詰米	3~40000.	五畿内・近江・丹波	（年々不同）
大豆	3~400.	摂津・近江・丹波・播磨	
大津御蔵詰米	4000.000	近江	

備考：『京都御役所向大概覚書』上

詰米は畿内徳川氏直轄領から徴収された年貢米の一部である。次に、二條城蔵詰米が収納されていた地域を確かめておこう。

畿内直轄領の年貢米は基本的には江戸浅草御蔵・大坂蔵（大坂城御蔵・難波御蔵）と二條城御蔵・大津御蔵に納入されることとなっていた。また畿内・西国の年貢金銀や運上金銀・冥加金銀は主に大坂御金蔵に納入され、収支の精算・確認後に江戸に回送されていた。

表3は正徳四年（一七一四）の徴収・納入地域を表示している。二條城蔵詰米の場合は、五畿内と近江・丹波・播磨から集められている。これらは各地域村々の年貢皆目録や明細帳でみられるが、明細帳で再確認しておきたい。

天保十五年三月の摂津国西成郡海老江村（大阪市福島区）の明細帳によると、江戸廻米と大坂御蔵・二條御蔵に納められたことを記している¹⁵。

一 御廻米津出シ中津川通江凡拾町余小船二而積送り、夫今上荷船又者天道船江積入、福嶋村郡中備蔵迄積送り、此蔵二而御改請、夫今廻船へ積入申候、尤当村より福嶋村并二大坂迄御米運賃御米壹石二付米七合ツ、村方今相渡シ申候、且亦大坂御蔵納二相成候節も右同断、運賃村方今相渡シ申候、

京二條御詰米二相成候節者右中津川通迄村方今小船二而積送り、夫今御役船二而鳥羽伏見へ積送り申候、二條御蔵迄車牽二而、車力賃米御年貢米之内二而被為 下候、尤問屋入用并二納差配入用者村方小入用二相掛申候、

海老江村の場合は江戸廻米は福嶋村にある郡中備蔵まで運び、そこで米改めを請けて廻船へ積み込んで江戸浅草御蔵へ納入していた。大坂御蔵納の場合も村方から大坂まで運んでいた。二條御蔵詰米は鳥羽伏見まで船、そ

これから車で運送していた。

これは摂津・山城・河内・和泉国内の村々の元禄期以降の明細帳では、ほぼ同様の年貢米納入方法が記されている。宝暦十年（一七六〇）の河内国茨田郡三ツ嶋村（大阪府門真市）の明細帳によると、「御年貢米五斗入」として「大坂京橋迄舟路式里半、百姓小船にて下シ申候ハ百姓入用、夫々京都・江戸御蔵場迄 御公儀様御入用、大坂御蔵場迄持込御蔵詰仕候」とある。¹⁶⁾

また年貢銀や運上銀・冥加銀も二條城・大坂蔵に納入されていた。二條城には、正徳から享保初年には年貢金銀・運上銀が三万一千八百八両余、銀高一貫目余があった（表4）。ここから宝永二年（一七〇五）の御買米三万俵の代金一千八百〇両余が支出され、江戸に八百一〇両余が上納されている。¹⁷⁾

また大坂城御金蔵には、『元禄御金蔵金銀納方御勘定帳』によると、元禄十六年（一七〇三）に年貢金一三万八千八百三両余、銀高三千八百五貫四十四匁余、諸運上金高五万一千九百七両余、銀高九百五〇貫三百七匁余があった。御金蔵の収入にはこのほかに蔵払米として、大坂・二條で一万二千五百両余、九百七貫三百九匁余も計上されている。これに地代金五〇八二両他を合わせて、この年には総計二万三千三百三十六両余、六千三百九〇貫六千八百一匁余の収納があった。

同様に、宝永元年には年貢金銀一六万三千六百七十三両余、銀高一千七百七貫二〇匁余、諸運上七万七千〇二七両余、五〇〇貫三百五匁余、蔵払米八千四百二十五両余、二千九百一十八匁余、地代金五〇八二両余、総計二万五千四百一十三七両余、二千八百六貫五十二匁余の納入があった。¹⁸⁾

表4 二條城御蔵の錢座運上金銀収支内訳

	金高 (両)	銀 (匁)	買米高 (石) (表)
運上金高	31888.0	592.1675	11331.700 (30000)
内訳			
御買米代	1870.2	8.7100	
諸色入用	439.3	6.2000	
		(14.9100)	
小 計	12310.1		
江戸上納	8610.12	552.530	
*溝築地入用	5522.2	5.430	
牢屋普請入用	4487.0		
残 高	957.32	19.297	

備考：『御役所向大概覚書』上

二 二條城蔵詰米の機能と変化

城米・詰米は、徳川政権のもとでは將軍直轄領の年貢米を江戸廻米として江戸浅草蔵に廻送・貯蔵するとともに、畿内では詰米として大坂城・二條城あるいは大津・高槻などの各地米蔵に貯えていた。詰米は毎年の年貢米徴収とともに入れ替えられ、旧年の詰米は古米として払米され市中に流通していた。大坂・京都では、古米は町奉行管理下に入札方式で払い下げられたが、地域の商人が大きな特権を附与されて実施されていた。¹⁹⁾

軍事用兵糧米の性格は大坂夏の陣を最後に、基本的には失われた。城郭守衛の役職や任務に就いた家臣団（大名、旗本・御家人、与力・同心など）への切米・扶持方および維持・修復経費などに用いられるように性格を変えている。

享保十五年（一七三〇）の「江戸二條大坂御除金并御囲米書付」によると、徳川政権は「江戸御貯米」として五万石、「大坂御囲米」として七万石、「二條御囲米」として一万石の御蔵詰米を書き上げている。これらは毎年払米として売り払われ、新米と詰め替えられていた。²⁰⁾

いずれも「御貯米」「御囲米」と表示されているように、軍事用の性格は払拭されている。さきに触れたように、軍事的役割の変化の現れは元禄十二年（一六九九）に大津御蔵の糶蔵が朽ち損じたためにこれを廃止し、二條城内に新規に設置したときが契機であった。またこれよりさき、元禄三年には高槻御蔵が廃止され、翌年から大坂御蔵に納入されるように変更されていることもそれを示している。²¹⁾

一、高槻御蔵者御用無之二付、元禄三年入札被 仰付元禄四未春御払二罷成候、

代銀九貫三百拾五文七分 未五月大坂 御城納

ここに「御用無之ニ付」とあるように、高槻御蔵の持つ軍事的役割・機能が必要なくなったゆえのお払い、売却であった。

これは元禄十二年以前には大津御蔵詰米から所司代役料とその与力切米が支給されていたが、以後は所司代役料が支給されなくなり、与力切米も二條御蔵から渡されるように変更されたことにも示されている。⁽²²⁾この背景にも、寛文八年（一六六八）に京都町奉行が設置され、京都市中の公事・訴訟や秩序維持などの権限が所司代から町奉行とその与力・同心への移管があった。

表5は、正徳四年（一七一四）に二條城御蔵詰米が京都役職者や与力・同心、地役人らの役料や切米・扶持方米として支給されていた事例である。詰米高三万五一石余が禁裏関係、所司代関係、東西町奉行関係、それに二條城守衛関係、御殿番関係、御番衆関係、御蔵番関係などの頭役料および与力・同心らの切米・扶持方として支給されている。その総高は三万五九石余に達しており、詰米を超過している。

二條城の蔵詰米（囲米）は享保十五年には一万石であったが、享保七年に江戸回送の年貢金銀・運上銀・冥加銀の内から五千両が二條城に差し置かれるようになっていた。これは二條御囲米の払代から差し引かれて二條城に納められた「二條 御城御除金」である。これ以外にも「前々より之御除金」として五千両があり、さらに享保七年から年々の御物成六千二百九十二両余が納められていた。⁽²³⁾これらが役料・切米・扶持方米の補填分となっていたとみられる。

表5に見られるように、詰米高のほとんどが京都役職関係諸役人の給与であった。その残り分が払米として毎年入札に掛けられていた。一万石の囲米が払米となっていた。⁽²⁴⁾

表5 正徳4年二條城蔵米切米・扶持方定渡方

切米・扶持方内訳	石 高	扶持方米
詰米高 内訳	30051.984	
傳奏料	350.000	175石2名分
傳奏料	200.000	40石5名分
傳奏料	42.000	42石1名分
神事料	30.000	1名分
禁裏御兒	70.000	2人分扶持方
所司代	5530. 余	水野和泉守
内与力切米	4000.000	80石宛50人分
同心切米	1000.000	10石宛100人分
同心扶持方	530. 余	3人扶持宛100人分
東町奉行役料	600.000	
内与力同心	2365. 余	与力同心切米扶持方
与力切米	1600.000	80石宛20人分
同心切米	500.000	10石宛50人分
同心扶持方	265.000	3人扶持宛50人分
西町奉行役料	600.000	
内与力同心	2365. 余	与力同心切米扶持方
与力切米	1600.000	80石宛20人分
同心切米	500.000	10石宛50人分
同心扶持方	265.000	3人扶持宛50人分
	1035. 余	小宮山丹後守
内与力切米	600.000	60石宛10人分
同心切米	290.500	7石宛37人分/10石5斗宛3人分
同心扶持方	145. 余	2人扶持宛38人分/3人扶持宛2人分
	502. 余	山田伊豆守
内与力切米	240.000	60石宛/4人分
同心切米	292.000	10石5斗宛13人分/7石宛6人分/14石1人
同心扶持方	70. 余	2人扶持宛20人
	503. 余	長崎伊豫守
内与力切米	240.000	60石宛/4人分
同心切米	189.000	10石5斗宛14人分/7石宛6人分
同心扶持方	74. 余	2人扶持宛18人分/3人扶持宛2人分
禁裏 辻番人	30.000	5石宛6人分
御門番組頭	120.000	小宮山傳右衛門
内与力同心	906. 余	与力同心切米扶持方
与力切米	613.500	61石350宛10人分
同心切米	228.800	10石宛12人分/13石6斗宛8人分
同心扶持方	64. 余	3人扶持宛12人分/8人扶持なし
御門番組頭	120.000	曲淵十左衛門
内与力同心	906. 余	与力同心切米扶持方
与力切米	613.500	61石350宛10人分
同心切米	218.600	10石宛13人分/13石6斗宛6人分/7石宛1人分
同心扶持方	74. 余	3人扶持宛14人分/6人扶持なし
御殿番	35.000	三輪七之助
城太鼓打入用	1.410	抹香代
御殿番坊主	227. 余	坊主切米扶持方17人分
坊主切米	167.000	10石宛17人分/7石1人分

〈研究ノート〉近世二條城蔵詰米と京都商人

切米・扶持方内訳	石 高	扶持方米
坊主扶持方	60. 余	2人扶持宛17人分
切米	70.000	富田平右衛門
役料	60.000	富田平右衛門
組同心	73. 余	同心切米扶持方
同心切米	47.000	10石宛4人分/7石宛1人分
同心扶持方	26. 余	3人扶持宛5人分
切米	70.000	梶田助右衛門
役料	60.000	梶田助右衛門
組同心	73. 余	同心切米扶持方
同心切米	47.000	10石宛4人分/7石宛1人分
同心扶持方	26. 余	3人扶持宛5人分
	35.000	藤林道壽
同荒子小頭	61. 余	荒子小頭切米扶持方
荒子切米	35.000	3石5斗宛10人分
小頭切米	5.250	小頭1人分
荒子扶持方	21.240	1人扶持宛10人分/2人扶持小頭1人分
	200.000	後藤縫殿助
	35.000	里村昌億 扶持方20人扶持
	70.000	中井主水 扶持方40人扶持
	35.000	角倉甚平 扶持方20人扶持
京都火消番	530. 余	在京中 扶持方300人扶持
御目付外加扶持	700. 程	
御城内両同心	141. 余	2人扶持宛40人分
祭礼料	100.000	西八条六孫王社
葵祭下行米	1330.000	
内堂上方	300.000	
上賀茂方	551.800	
下鴨方	478.200	
二条御番衆	4300. 程	御番衆五分一米
二条御番衆	500. 程	御番衆拾分一大豆
牢舎人扶持方	180. 程	牢舎人扶持方・馬借駄賃米
役料切米	40.000	能勢平右衛門切米
役料切米	40.000	多賀彦八郎切米
役料切米	40.000	伏谷久太夫切米
役料切米	40.000	奈佐清太夫切米
御蔵手代扶持方	42. 余	3人扶持宛8人分、他に給金10両
御蔵番扶持方	15.8 余	
切米	10.500	3石5斗宛
扶持方	5.30 余	1人扶持宛
御蔵小揚	103. 程	
内小揚頭		2人扶持宛3人、他に給金5両宛
平小揚		1人半扶持宛35人、他に給金3両宛
二条大番衆他合力	4000.000	大番衆・目付衆合力米
内五分四米	2880.000	与力三ツ半物成、同心1人ニ付3石宛
五分一米	720.000	
五分四大豆	320.000	
五分一大豆	80.000	
合 計	30955.900	—

備考：『京都御役所向大概覚書』上

二條御囲米

一米一万石

是ハ年々新米と詰替、古来ハ於京都御払二成、代銀ハ翌年之御遣方二成申候、但夏中ふけか、り候分、御払成代銀御蔵ニ除置、代新米詰候上二而、書面之通御座候、

ここには詰米が囲米と表示され、新米と入れ替えられた古米が払米となり、その代銀が翌年の種々の経費として用いられるようになっていること、また夏の「ふけ」米の代銀も払米となり、新米入れ替えまで御蔵に置かれ、詰め替え後に翌年の経費に使われていた。

二條城の払米は享保二十年に米会所が設置されて以後、米会所での入札を経て市中に流通した。京都の米会所は京都町奉行が主宰・管轄する金融機関としても機能しており、公家・武家をはじめ市中一般に貸し付けられていた。これは米会所貸付方と称され、京都商人に委託され銀・銭の貸付を行っていた。⁽⁵⁾

町奉行の貸付事例は大阪でも確かめることができる。大坂町奉行所の運営経費は、元和五年（一六一九）以来大坂御金蔵に収納される年貢金銀・運上銀・冥加銀から必要に応じて随時支出されていたが、それが以前の方式は残しつつ宝暦十三年（一七六三）から急入用分に限り、東西奉行所で銀三〇貫目づつ六〇貫目に制限された。

さらに明和八年（一七七二）には両町で五〇貫目づつ一〇〇貫目に限定されるように変更された。その年間運用資金の不足分は市中の闕所金銀などを基金にした貸付業務で補っていた。京都の貸付方の運営は徳川政権の各地管轄役所の自己資金による運営という共通の特色を示すものであろう。⁽⁶⁾

三 二條城藏詰米と京都商人

(一) 藏詰米・金銀と呉服師

二條城御藏の城米と京都商人の関わりについて確認しておこう。

京都商人と徳川政権の關係は、大坂を参考にすれば、後藤縫殿助や茶屋四郎次郎らの家康側近商人、いわゆる初期特権商人と、元禄期の流通構造の変化や徳川政権の政策に密着して展開した新興町人⁽²⁾とに区分される。二條城の御藏詰米と年貢銀などの運用は、慶長から慶安期には軍事的役割が強く、毎年の新規の詰め替と古米の払米として売却があり、初期特権商人が関わったとみてよい。

後藤・茶屋氏らもそうであったように、京都における元禄期以前の初期特権商人は呉服師であった。呉服師は後の呉服商・呉服店とは違い、禁裏や徳川家(家康ほか)あるいは諸大名の屋敷に出入りし、呉服物やその他の品物を注文に応じて京都で呉服その他を調達し納入する御用達商人で、独占的・特権的な商人であった。特に幕府の御用を専門に勤める公儀呉服師は、慶長八年(一六〇三)以後、家康の側近であった後藤縫殿助・茶屋四郎次郎・亀屋榮任、元和年間(一六一五～二四)には尾州茶屋四郎次郎・上柳・三島屋を加えて呉服師六軒仲間が成立している。仲間の人数は寛永期に一軒、貞享四年(一六八七)に一軒、元禄十年(一六七九)に七軒、宝永三年(一七〇六)に六軒が追加され二一軒に増加している。その後幕府財政の悪化もあって利益が減少したため経営難に陥り、享保期には八軒に減員されている⁽³⁾。

公儀呉服師とは違い大名と関わった京都商人もいた。薩摩島津氏の呉服所であった錢屋利兵衛(中島氏)であ

る。錢屋は慶長七年（一六〇二）に和泉国堺から京都烏丸通下立売南堀ノ内町に移住して創業したとみられる。代々錢屋を名乗り、寛永十六年（一六三九）ごろには島津氏の御用達商人として呉服以外の諸品物だけでなく金銀の貸付も行っていた。いわゆる大名貸であるが、その古い事例では慶安元年（一六四八）九月四日付けの証文が残されている。貸付銀高は一〇貫目で、慶安四年には元利共に完済予定の証文であったが、利息の支払いは元禄期まで続いている。⁽²⁶⁾

『中島家文書目録』（大阪経済大学日本経済史研究所）によると、島津氏呉服師錢屋はこの後も貸付を徳川政權終焉まで継続し、島津氏だけではなく五〇家以上の大名に貸し付け、両替や質屋・蠟など商業経営を広げている。もちろん幕府御用金の調達、所司代・京都町奉行、与力・同心らへの貸付など支配行政役職との関係も維持し、京都商人の特色を示している。

さきに触れたように、藏詰米の軍事的役割が減退・喪失し、二條城の藏詰米も京都政治・行政役職者の役料・切米・扶持方米給与に変化し、その残高のみが払米されるようになった。また幕府財政の悪化と政治・行政機構の運営経費が制限されるようになったことで大坂町奉行所のように、経費も役所自らの補填で賄われるようになり、商人に頼らざるをえなくなったのである。京都の場合、その契機は寛文八年（一六六八）の京都町奉行の新設から元禄期の行政機構改変による大津御藏の再整備、二條城への集約にあった。

後藤・茶屋氏ら呉服師は元禄期には近世商人としての性格を変えてきたが、その一つに、享保元年（一七一六）に二條城内の糶と年貢銀が呉服師二人に渡された事例がある。⁽²⁷⁾

一、御本丸御多門御糶式千石 元禄十三辰分同十五午迄
御藏四戸前二納

一、大錢七千百七拾貫五百貳拾八文宝永七寅十二月分正徳六申二月迄 御蔵有

是者二之御丸御米蔵江入置申候、

(張紙)

二條御蔵ニ有^レ之候大錢不^レ殘享保元申十月十六日迄二呉服師共江相渡申候、

糯二千石は、元禄十三年に大津御蔵から二條城本丸多門收納に変更されたが、その元禄十五年までの分が四戸前御蔵に残っていたこと、また二の丸米蔵に年貢錢の宝永七年から正徳六年までの分七・一七〇貫五・二八文が収蔵されていたことが記される。注目したい点は、二條御蔵にある大錢がすべて享保元年に「呉服師」へ渡されていたとある張紙の記事である。二人の呉服師の姓名は不明であるが、詰米・年貢銀が京都商人によって取り扱われた事例である。

(二)宝永二年の御買米と為替御用達商人

元禄四年(一六七五)二月、幕府は大坂御金蔵から江戸への金銀輸送方法を変更し、為替御用達十人を指名した。宝永二年(一七〇五)・三年の御買米御用にこの為替御用達が関係している。芳野屋惣左衛門と中川清三郎(代乾忠右衛門)の二人が対応した事例である。宝永二年は、御買米御用に関する「当座運上金銀錢之事」に記された諸色入用の部分である。これは京都商人が大坂で三万俵の米を買い調え江戸廻しにした際の経費を記している。このときの京都商人二人のうち中川清三郎はさきに触れた呉服所ではなかったが、有力な初期特権商人の一人であった。金銀為替御用達十人の一人で、享保二年もなお為替御用達であった。^{①)}

御買米三万俵の諸色入用高が四・三・九両三步と銀六匁二分で、御買米の金高と合わせると一万二・三・一〇両一分と

銀一四匁九分一厘であつた。諸色入用分については両商人に渡されている。⁽³²⁾

金四百三拾九兩三步銀六匁式分 諸色入用

是者御買米三萬俵大坂ニ而相調、江戸廻被ニ 仰付一候ニ付、江戸・大坂ニ而諸色御入用并右御用相勤候町人
兩人江被レ下候御金共如レ此、

式口金都合壹萬貳千三百拾兩壹歩銀拾四匁九分壹厘

銀ニシテ七百三拾八貫六匁貳拾九匁九分壹厘

但、六拾日替

右者当春御買米為ニ御用一芳野屋惣左衛門・中川清三郎代乾忠右衛門大坂江罷下、調上候御米代并御米廻船ニ
積立、大坂表出船江戸着浅草蔵詰迄之諸色入用金、町人共差出候勘定目録吟味之上相違無^レ之ニ付、此度御
金不^レ残三輪市十郎方々請取、右町人江相渡り候、

商人らが差し出した御勘定目録を吟味して、諸色入用は宝永二年七月に錢座運上金の内から渡されている。こ
れは大坂御金蔵から江戸への金銀輸送が為替手形扱いに改定されたための対応である。

さらにこの商人二人は翌年には御買米三万俵の代金と考えられる八六一一兩二朱と銀五五二匁五分三厘を、宝
永三年七月・八月に四度に渡り江戸へ為替で上納し、その請取証文が御金奉行から三輪市十郎に送られている。⁽³³⁾

金八千六百拾兩壹歩貳朱

銀五百五拾貳匁五分三厘

是者宝永三戌年七月・八月四ヶ度ニ江戸上納為替ニ成候ニ付、芳野屋惣左衛門・

中川清三郎相納、御金奉行四人々三輪市十郎方江請取証文来ル、

これは徳川政権が享保改革以前に行つた米価調節の事例と考えられる。なお三輪市十郎は御殿番頭で、二條城

内の御蔵奉行ほかの役職を管理していたとみられる。

おわりに

城詰米の機能は年貢米の徴収ごとに詰め替えられ、毎年払米されていたように、表面上は失われていなかったが、寛文八年（一六六八）に京都町奉行所が設置されて以後は京都および二條城の役職者や地役人の役料や切米・扶持方米として支給されるようになり、残米だけが払米として処理された。この払米の売買を京都商人に委託するため、享保二十年（一七三五）に米会所が開設された。この米会所に関わる商人の一人に恵比寿屋莊兵衛と前川五郎左衛門がいた。

京都の米会所については、これまでほとんど分析・検証が行われてこなかったが、それは絶対的な史料の不足によっていた。これを埋める史料群が前川家文書である。同文書には商い関係から家関係、美術品・工芸品など、商業活動と私生活にわたる大量の古文書が残されている。これは現在佛敎大学所蔵で、『前川五郎左衛門家文書目録』全第四集として整理されており、総点数は二万五二六六点になる。

本稿は、この前川家文書を研究するに当たって、その前提として二條城の蔵詰米の概況について確認を行った。『前川五郎左衛門家文書目録』全第四集の刊行は、分割されていた文書群が一つの文書群として取り扱えることとなり、商家文書としての性格がより明解になった。商家文書群の性格や特徴についてはさらに詳細な検証が必要であるが、ここでは前川家文書の特徴を指摘して、今後に向けた研究の大まかな見通しとしておきたい。

商家文書群としての特徴は三点ほどあげられよう。その一つは創業時期である。初代莊兵衛義虎が延享三年（一

七四六）九月に京都へ奉公に出て、その後両替業を始め、急速に蓄財し、後には京都糸割符仲間に加えられるまでになり、有力な京都商人の一人となったことである。近世中期の創業ではあるが、徳川政権、特に京都町奉行所と結びついた商業活動により経営拡大した点である。目録には米会所貸付方と公金の取り扱い、それを基金にした貸付業の記録が多いが、これは京都町奉行管轄の米会所とその特権を背景にした商業活動の結果であり、近世商人の特徴を備えていたことである。

二つには、近世特権商人のような系譜はもたず、呉服や酒あるいは綿・油など特定の品物を商って発展した商人ではなく、最初から金融業を中心に経営を展開・拡大した点にある。いわゆる市中金融を中心にした貸付業務、金貸業を商いの基盤としていたことにある。それを基に、前川家も多くの近世商人と同じく大名・旗本などの掛屋・用達も勤め、大名貸も行っているが、それは「由緒ある」京都商人の経営方式に倣ったもので、経営自体に独自性があるかどうか疑問である。今後の検討課題であらう。

また三つには、これらの特徴は近世初期特権商人の大坂の淀屋、京都の茶屋四郎次郎家、最初に大名貸を始めたと言われる那波屋、その後台頭する新興町人としての大坂の鴻池あるいは住友などの商いとは異なった経営形態をとっていたが、近世中後期とはいえ、「特権」を得ることで商人としての成長があったことを示している。その意味では、近世中期以降に経営を拡大した近世商人のあり方を解明する好材料であらう。

〈注〉

- (1) 『京都町触集成』全一三巻、『京都の歴史』全巻、『史料 京都の歴史』全巻などはその代表的成果であらう。また最近の研究では、鎌田道隆『近世京都の都市と民衆』（思文閣出版、二〇〇〇）、宇佐美英機『近世京都の金銀出入と社会慣習』（清文堂出版、二〇〇八）、杉森哲也『近世京都の都市と社会』（東京大学出版会、二〇〇八）などがある。

- (2) 『京都の歴史』第五卷・六卷。第五卷は近世の展開、第六卷は伝統の定着。
- (3) 前掲杉森および鎌田氏らの研究はその流れで、それに対し宇佐美氏らの研究は商業・流通構造に視点を据えた研究の一つだろう。
- (4) これらの特徴は近世初期特権商人、その後には頭領する新興町人の商いとは異なった経営形態をとっていた。近世中期以降に経営を拡大した史料の全容は『前川五郎左衛門文書目録』第一集から第四集に示されている。また目録に収録されていない家関係の記録類や業務用の諸道具、工芸品や種々の調度品もある。
- (5) 前川家の文書目録によると、米会所貸付方と公金の取り扱い、それを基金とした貸付業の記録が多く、二條城の城米・詰米とその払米などに関する検証、京都町奉行管轄の米会所とその業務、実態を説明するためには重要な商家文書群であろう。史料は商家文書としての性格・特徴、その意義の解明や、前川家が糸割符仲間に加えられるような大商人にまで成長した要因や具體的経過を説明する貴重な史料でもある。
- (6) 遠国奉行の運営収支は幕府財政の悪化とともに窮迫したことは否定できない。大坂町奉行所の年間運営経費は元禄期以降、年間限度額が制限されるようになった。それまでは大坂城御金蔵に収納される畿内西国の冥加金銀・運上金銀から必要に応じて運用する方式であった。それが以前の方式は残しつつ宝暦十三年（一七六三）から急入用分銀三〇貫目づつ六〇貫目であったが、明和八年（一七七二）には五〇貫目づつ一〇〇貫目に限定された。その年間運用資金の不足分は市中の廻所金銀などを基金に貸付業務で補っていた。京都の貸付方の運営は徳川政権の各地管轄役所の自己資金による運営という共通の特色を示すものであろう。大坂町奉行所については拙稿「大坂町奉行所の財政基盤と構成」（『大阪の歴史』第四十四号、一九九五、後に拙著『大坂町奉行と支配所・支配国』第六章に改編収録。東方出版、二〇〇五）参照。
- (7) 『国史大辞典』（吉川弘文館）、「城詰米」参照。
- (8) 『新修大阪市史』第三卷第二章第二節（大阪市、平成元年）参照。
- (9) 『京都御役所向大概覚書』上巻、三九三頁。
- (10) 前同、上巻一七〇～一七二頁。
- (11) 前同、下巻三四二、三四三頁。
- (12) 前同、下巻三四三頁。
- (13) 『大阪市史』第一、二八九～二九一頁。
- (14) 『手鑑』『手鑑・手鑑拾遺』（大阪市史史料第六輯、四九頁）。
- (15) 羽間市右衛門家文書。

- (16) 『門真市史』(門真市、平成九年) 第三卷、一〇～一二頁。
- (17) 前同、上巻、一七二～一七三頁。
- (18) 前掲拙著『大坂町奉行と支配所・支配国』表一七参照。大野瑞男『江戸幕府財政史料集成』(吉川弘文館、二〇〇八) 上巻、一八～二八頁。
- (19) 京都での茶屋・後藤氏などの呉服師、また大坂での蔵元・掛屋などの米・両替商人らがそれである。『京都の歴史』第五卷・六巻、『新修大阪市史』第三卷・四巻などを参照。
- (20) 大野前掲『江戸幕府財政史料集成』上巻、五一～五四頁。
- (21) 『京都御役所向大概覚書』下、三九三頁。
- (22) 前同、下巻、三四三～三四五頁。
- (23) 大野前掲書、五一～五四頁。
- (24) 大野前掲書、五一～五四頁。
- (25) 『前川五郎左衛門家文書目録』第一集参照。多くが米会所貸付方に関する記録で、その関連の証文類である。
- (26) 大坂町奉行所については、前掲拙稿「大坂町奉行所の財政基盤と構成」参照。大坂町奉行所では、關所金銀を基金にして与力・同心、町方に貸し付けていたが、その貸付業務に商人は介在していなかったようである。
- (27) 前掲『新修大阪市史』第三卷参照。
- (28) 『国史大辞典』五巻、および『京都の歴史』第五巻参照。
- (29) 大阪経済大学日本経済史研究所蔵古文書目録第一集『中島家文書目録』(平成九年、その「解題」(渡邊忠司執筆) 参照。
- (30) 前掲『大概覚書』上「二條城御蔵米金銀」、一七一～一七二頁。『国史大辞典』「呉服師」の項参照。
- (31) 中川清三郎は呉服師仲間の一人で、没落していく商人の一人である。『京都の歴史』第五巻参照。
- (32) 前掲『大概覚書』上、一七三頁。
- (33) 前掲『大概覚書』上、一七二～一七三頁。